



Title	児童虐待研究における量的研究という視点
Author(s)	小泉, 径子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 139-148
Issue Date	2018-08-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.132.139
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71479
Type	departmental bulletin paper
File Information	090-1882-1669-132.pdf



児童虐待研究における量的研究という視点

小 泉 徑 子*

【要旨】 日本において児童虐待は重大な社会問題となっており、虐待を受けた子どもは様々な困難を示すことが多く報告されている。臨床家の手によって多くの事例報告がなされているが、一部の臨床家や、現場と連携している研究者によって、量的研究も少しずつ進められつつある。虐待を受けた子どもの社会的認知に関する研究や生理学的視点からの検討など、様々な方向性から研究が行われている。量的研究によって得られる知見は、虐待を受けた子どもによく見られる状態、傾向についてのものであり、他者との共有が容易である、一般的な知識とすることができる、その他の指標との関連を検討することが可能であるといった利点がある。量的研究は質的研究と対立するものではなく、むしろ両輪となるべきものであり、今後両者の垣根が低くなり、互いに補い合い支え合うものへと向かっていくことが期待される。

【キーワード】 児童虐待 量的研究 マルトリートメント

1. はじめに

現在の日本社会において、児童虐待は極めて重大な問題となっている。2016年度の児童相談所による虐待の対応件数はおよそ12万件であり、その数は年々増え続けている。この件数の増加については、以前は虐待だと見做されていなかったことが、子どもの心身や命に重大な悪影響を及ぼす、不適切な行為であると一般に知られるようになり、適切な通報、対応が行われるようになった結果でもあるため、必ずしも以前と比べて特段に悲観的な状況というわけでもない。しかしながら児童虐待と不可分であると考えられる家庭や子どもの経済的な貧困（森田，2006；松本，2010）は、現代の社会情勢の中で悪化する一方であり、また貧困、児童福祉政策が手厚くなる気配が見えないことから、今後、子どもたちを取り巻く社会・経済的環境が好転する希望は持ちづらいのが現状である。

このような中で、虐待を受けた子どもの保護・支援は急務であるが、虐待環境から救出するだけでは、虐待による被害は終わらないことが明らかになってきている。虐待というトラウマを抱えた子どもが、保護されたのちも、周囲との人間関係をうまく構築できない、仕事が続かないことによる貧困といった様々な社会適応の困難や、精神的問題を抱えてしまいやすく、さらにその影響が世代を超えて連鎖してしまうことが、少しずつ知られてきている。例えば、非行少年には虐待の被害経験者が非常に多く（岡田，2002）、里親家庭や児童養護施設内での暴力も極めて重大な問題となっている（森田，2011）。虐待の加害親は自らも虐待の被害者であることが極めて多い。一方でリストカット、不特定多数との性的関係といった自己破壊的な行動もみられるほか、DV被害など他者からの被害に遭いやすいとも言われている（八木ら，2007）。

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程修了
DOI : 10.14943/b.edu.132.139

このように、虐待を受けた子どもは、生涯に渡って社会生活上の困難を抱えやすく、そのことは本人たちにとっても、周囲の人々、ひいては社会全体にとっても長期にわたって大きな困難や負担を齎す。虐待を受けた子どもの社会適応の改善には、社会全体で取り組んでいくことが急務である。

ではなぜ、虐待を受けた子どもはこのような困難を示すのか。それには様々な要因が考えられる。真っ先に浮かぶのは、適切なロールモデルの欠如ではないだろうか。虐待とは不適切な養育のことであるのだから、少なくとも、加害親が子育てや家庭生活における望ましいモデルではないことは容易に想像できる。また、加害親は就業状態が極めて不安定であったり、子どもに対してばかりでなく、DV関係に陥っているなどパートナーとの関係性が不安定であることも多く、周囲から孤立しているケースも少なくない。このことから、社会とのかかわり方や人間関係の持ち方についても適切なモデルとは言えない場合も多いだろう。また、加害親がロールモデルとして不適切なばかりでなく、家庭そのものの社会からの孤立や親の人間関係の貧困などから、家庭内、そして家庭外においても手本となるべき大人に出会いにくく、社会生活全般における適切なモデルを獲得する機会を欠いているということが想定される。

続いて、トラウマ、そしてPTSDによるものを想定する。虐待を受けた子どもは、親からの様々な種類の暴力という重大な傷つきを抱えている。虐待によるPTSDは災害や事故などによる単回的なストレスとは異なり、長期にわたり反復されたストレスの結果であるとして複雑性PTSDと呼ぶことがある（高貝，2014）。DSM-5に示されたPTSDの診断基準には、「外傷的な出来事と関連した認知と気分の陰性変化」や「外傷的な出来事に強く関連した覚醒度と反応性の顕著な変化」が含まれる。このような症状、たとえば恐怖や怒りのような陰性感情や過度の警戒心などは、周囲の人々との人間関係を穏やかなものにする上で困難をもたらすだろう。

また、虐待家庭や被害児童の置かれた社会的環境の劣悪さ、被害児童の持つ、あるいはその後獲得する社会的資源の貧しさも要因のひとつであるかもしれない。貧困は極めて大きな虐待のリスクであるが、貧困による教育機会の不足、頻繁な転居や不登校を含む学業への集中を困難にする要因が多いことから学力が十分に身につかず、将来の進学や安定した就業へのハードルが高くなる。学業をドロップアウトしやすいことや、職業選択の幅が狭いことは、暴力犯罪などのリスクになるだろう。

勿論、これらの要因は単独では成立せず、複雑に絡みあい相互に影響を与えていることであろう。これらはいずれも、社会的な状況の中で生じる特徴であり、定量的に測定することは難しい。日頃、支援に関わっている方々においては、虐待を受けた子どもたちの示す対人関係の困難、社会適応の困難については日々の実践の中で深く感じていることと思う。しかし、実際に実情を知らない人々に、このような肌で感じた感覚を伝えることはとても難しい。2018年現在、女性がセクハラに対して声を上げる#MeToo運動が盛り上がりを見せているが、これらに対してまるで的外れで被害者をさらに傷つけるような言動が第三者から平気で浴びせられるのは、目に見えない傷つきを、同質の被害を受けたことのない他人が想像することは難しいからだろう。虐待を受けた子ども、そしてその後について、社会で支援が進まない要因の中には、政治家などをはじめとする人々にとって、このような状況がいまひとつ実感をもって伝わっていないことがあるのではないかと考えられる。

2. 社会的困難に対する量的研究の試み

このような中で、実験的・統計的手法を用いて、虐待を受けた子どもの示す、虐待を受けていない子どもとは異なる特徴を定量的に測定しようとする試みが、近年進められつつある。これらの多くは、実験室環境で子どもになんらかの評価基準が明確な課題を行わせる、あるいは質問紙等の測定をするなどし、虐待を受けた経験がある子どもとない子どもの間でその得点や傾向に差があるかを検討するというものである。

量的な手法を用いて測定することの最大の利点は、同じ基準で測定できること、そのため、多くの人々、広い領域内でデータを共有、解釈できることである。また、同じ人物が同じ場所で行わずとも、条件を設定することで、同一の基準でデータの収集を行うことができるため、広くデータを集めることが可能である。さらに、このような手法で測定されたデータは、様々なその他の因子との関連を検討することが可能である。

そのような指標にはどのようなものが該当するか。たとえば、身近なところでは学力テストの成績や、田中ビネー式やウェクスラー方式での知能検査なども定量的な指標である。これらは臨床現場では主に個人の特性を把握し、支援に繋げるために利用されているが、一方で、その課題の得点を以て個人の特性を測ることができるのは、非常に多くのデータと解析の積み重ねによって、その課題の標準化がなされているからであり、ひとりひとりの特性を理解する為にも、このような手法は必要なことなのである。

虐待を受けた子どもを対象としたこのような量的手法を用いた研究は、主に海外を中心にいくつか行われている。その中からいくつか、虐待を受けた子どもの支援において重要な示唆を与えと考えられる知見を紹介する。

社会において他者とコミュニケーションを取って生きていくためには、相手の表情を理解することや、その心理を推測すること、相手の性質を判断するといったことなどが必要不可欠である。相手の感情を理解することができなければ、ぶつかり合いが生じてしまうことは容易に想像できるだろう。また、社会で暮らすには他者へ協力的に振る舞うことが必要不可欠であるが、協力行動を行うためには他者が良い人か悪い人かを判断すること (Frank et al, 1993)、他者の感情を理解すること (Denham, 1986)、他者の信念を理解すること (Takagishi et al., 2010) が重要な役割を果たしているという知見がある。このような他者の内的状態の理解能力に関わる研究として、Chicchettiら (2003) は、他者の信念を理解する能力である心の理論 (Theory of Mind; Premack & Woodruff, 1978) の発達の段階を測定する課題である、誤信念課題 (Wimmer & Perner, 1983) を用い、虐待を受けた経験のある子ども、虐待を受けていない社会経済的階層 (SES) の低い子ども、SESが中流の子どもの間での課題通過率の差を検討した。各群共に100名を超える大規模な調査であった。この結果、虐待を受けた経験のある子どもは、受けたことのない子どもよりも有意に同年齢での課題通過率が低いことが示された。つまり、家庭の経済状況ではなく、虐待の有無が心の理論の獲得時期に重要な役割を果たしていることが示されたのである。

同じく他者の理解という領域において、表情が果たす役割も極めて重要である。表情理解では、Ekmanらの基本表情 (1970) の画像を用いた研究がいくつか行われてきている。Camrasら (1988) は、虐待を受けた子どもは他者の表情を区別することが、受けていない子どもと比べて苦手であることを示した。また、他者の表情を読みとることだけでなく、表情の表出が虐待を

受けたことのない子どもと比べ苦手なことも示された。また、母親についても、虐待の加害親は、虐待していない母親と比べて表情の表出が乏しく、さらに母親の表情表出は子どもの表情理解能力と相関があることも示された。Pearsら（2005）は、感情理解課題を、虐待を理由に保護され、現在里親の元で暮らす子どもと、虐待を受けておらず実の家族のもとで暮らす子どもに対して実施した。年齢、家庭の収入、知的能力を統制しても、虐待を受けた子どもは受けていない子どもと比べてこの課題の成績が低いという結果を示した。誤信念課題を用いたChicchettiらの研究と同様、経済的な要因や年齢を統制することで、虐待そのものが、子どもの他者の信念や感情を推測する能力に悪影響を及ぼしているということを明らかにしている。

Pollakらは、虐待を受けた経験が子どもの感情理解に及ぼす影響を、受けた虐待の種別や、その表情に込められた感情の差に着目して明らかにした。2000年の研究では、虐待を受けていない子ども、身体的虐待を受けた子ども、そしてネグレクトされた子どもを対象に、ある人物が置かれた状況に対してふさわしい表情を選ぶという課題を行っている。その結果、ネグレクトされた子どもは、身体的虐待を受けた子どもや、虐待を受けていない子どもと比べて表情を選択する課題の成績が低いこと、そして身体的虐待を受けた子どもは、選択する表情が怒りに傾きがちであることを示している。2003年の研究では、課題中の事象関連電位（ERP）を測定し、課題の反応時間、脳の活動という二つの指標で、身体的虐待を受けた子どもは、他者の示す怒り表情に対して素早く反応し、さらにその顔から注意を逸らし、別のものへと向けるのに困難があることを示した。これらの研究は、身体的虐待・ネグレクトという受けた虐待の種別によって異なった影響を受けること、そして表情理解などに及ぼす影響は、それぞれの感情によって異なっているという、極めて重要な事実を示している。

これらを先行研究として、筆者は北海道大学大学院教育学院在籍中に、同様に量的研究の手法を用いて、虐待を受けた子どもに広くみられる特徴を明らかにしようと試みた。

そのうち、他者の表情理解に着目した研究（Koizumi & Takagishi, 2014）では、先行研究ではシンプルな表情を用いた課題が多かったことから、より現実場面に近い表情についての検討を行おうと試み、目から心を読むテスト（Reading the “Mind in the Eyes” Test; RMET; Baron-Cohen et al., 2001）という、複雑な表情を表出している写真を用いて研究を行った。この課題では、1つの顔画像について選択肢が4つ提示され、そのうち最も適切だと思うものをひとつ選択する。それぞれの写真は、ある表情を表出するように指示して撮影したものではなく、既存の写真について、写真を見た人々にその人物が示している表情を推測させ、最も多かったものを正答としている。つまり、「その表情が社会で一般的にどう解釈されるか」が正答となる課題であるため、社会一般で行われている表情理解との差異を測定する指標となると考えられる。Pollakらの研究において、判断の対象とする顔の示す情動の違いによって虐待を受けた子どもの示す特徴に差がみられたことから、28問の課題をそれぞれ正解となる表情によって「ポジティブ課題（7課題）」、「ネガティブ課題（10課題）」、「ニュートラル課題（11課題）」に分類して分析を行った。その結果、虐待を受けた子どもは受けていない子どもと比べて、ポジティブ課題の成績が有意に低いという結果を示した。そのほか2つの表情課題については差はみられなかった。

また、自閉症傾向尺度（Autism Spectrum Quotient; AQ; Baron-Cohen et al., 2006; 若林ら, 2007）については、虐待を受けた子ども、虐待を受けていない定型発達の子どもの間、虐待を受けていない自閉スペクトラム症の子どもの間で比較を行った（小泉ら, 2015）。反応性愛着障害、あるいはルーマニアの劣悪な孤児院の事例で見られた例（Rutter et al., 2007）のように、

虐待を受けた子どもが、自閉スペクトラム症やADHDに類似した状態像を示すということを述べている臨床的な知見は多い。薬剤の効き方などが異なることから、虐待による発達障害様症状を呈しているものと、生得的な発達障害の者とは、有効な支援や治療は異なっている可能性があるため、その鑑別は重要なことである。しかし杉山登志郎（2007）が、両者の鑑別の困難さを、一定期間適切な養育におかれた結果、社会性などを回復した者は抑制型反応性愛着障害で、回復しなかった者が自閉症であったとの言い方で表現したように、それには時間が必要である。この研究で用いたAQは自閉スペクトラム症患者においてみられる社会的スキル、注意の切り替え、細部への注意、コミュニケーション、想像力という5つの認知・行動傾向をそれぞれ測定する指標となっている。自閉スペクトラム症では定型発達者と比較し、これら5項目すべてが高得点を示す。この調査の結果、被虐待経験のある児童は、受けていない児童と比べてAQ得点が高く、自閉スペクトラム症の児童よりは低いことが示された。自閉スペクトラム症の児童は虐待を受けていない定型発達の児童よりもすべての下位項目で高い得点を示し、また被虐待群におけるAQの平均値は自閉スペクトラム症のカットオフポイントである20点を上回っていた。この結果は、被虐待児は自閉スペクトラム症児と類似した状態像を示すという臨床現場における報告と概ね一致するものである。しかし、それぞれの下位尺度ごとに比較したところ、被虐待群において、項目によってばらつきがみられ、虐待のない定型発達児と差がない項目と、差がある項目が分かれていた。このことから、一見表に出る症状は似ているようでも、その背景にある認知的な特徴は異なっており、またそれは測定可能なものである可能性が示された。これは将来的に、反応性愛着障害のような、虐待の結果として生じる発達障害様症状と、生得的な発達障害を短期間で区別する手法の開発に繋げることができるかもしれない。

Teicherや友田明美ら、医師を中心として、虐待を受けた子どもの支援について、脳科学的・生理学的側面からのアプローチも行われている。Tomodaら（2012）は、両親間のDVを目撃した経験のある人では、視覚野の灰白質の容積と厚さが減少することを明らかにした。その他にも、虐待を受けた子どもにおける中眼窩前頭皮質や中側頭皮質の容積の減少（De Brito et al., 2013）も報告されている。また、容積だけでなく活動についても、Takiguchiら（2014）は、1歳までに虐待を受けた子どもは、脳の報酬やモチベーションに関与する領域である線条体の活動が低下しており、金銭を伴う報酬に対しても反応が鈍いことをゲーム課題を行いながらfMRIを測定することで明らかにした。

ここまで挙げた先行研究は、虐待を受けた子どもの示す様々な特徴をとらえてきた。それだけでなく、虐待を受けていない子どもと、虐待を受けて保護されたばかりの子ども、そして保護後ある程度の期間を経過した子どもとの間での比較を行い、回復していく過程を示した研究も出てきた。Mizushima（2015）らは、施設で養育されている虐待を受けた子どもを対象とした研究において、唾液中ホルモン濃度を測定したところ、ストレスに関係するホルモンであるコルチゾルについて、虐待から保護され、同一の施設で一年以上暮らしている子どもと、虐待を受けていない子どもとの間では差がなく、虐待から保護されて間もない子どもたちは、これら二群と比べて高い値を示した。このことは虐待を受けた子どもが示す特徴は先天的なものではなく、あくまで被虐待経験によって生じた後天的なものであること、また安定した環境で生活することによって消失、あるいは低減していくものである可能性を強く示唆するものである。

3. 量的研究の問題点とこれから

これらの量的研究によって示された、虐待を受けた子どもにみられる特徴の多くは、おそらくは実践の場面で彼らに関わっている方々の実感からそう遠いものではないと思われる。無数の質的研究で報告された事例から、当てはまるものは多く見つけられるだろう。あるいは、そんなことは課題で測らなくてもわかる、と思われる方もいるかもしれない。だが、量的研究によって得られる知見の利益はそれではないと筆者は考える。量的研究で得られた知見は、明確に定められた基準において数値で示されるため、客観的に共有することが難しい。また、多くのデータを解析した結果であるため、ある特定の事例でのみ見られた特徴ではなく、虐待を受けた子どもに多く見られる特徴である、ということができる。だから、得られた知見が実践での実感と同じであって、それ以上のものではなくとも、それは失敗ではないのである。

勿論、このような一般的に「よく見られる傾向」だけで、それぞれの困難を抱えた当事者の問題を解決することはおそらく不可能である。実際の事例はすべてが異なった条件を抱えている。実際に筆者が遭遇した事例でも、その人物の抱える困難には、その家庭固有の事情や、家庭内での経験が大きくかかわっていると思われた。それは、一般的によくみられる傾向だけで理解、把握することはできない要因である。それでも、例えば「ポジティブな表情をポジティブだと理解することが難しい」、「他者の表情や特定の状況で感じる感情を怒りであると解釈しやすい」という傾向が、虐待を受けた子どもに多く見られるということを知識として持っていれば、誤解を招かないよう注意深くこちらの意図や感情を伝えるといった配慮を行うほか、彼らの示す行動や言動を理解する際にもその点に留意することができる。それは円滑な関係の形成・維持に役立っていると筆者は考える。実際に人と接する場面においては、それらの一般的な知識を土台として、さらにひとりひとりに特有の要素に注目するための感性を身に着けたいと思うものである。

一方で、質問紙や課題を用いた研究に対して多くの人が感じるであろうことに、測定しようとしていないものは測定できない、というものがある。つまり、そもそも研究を計画する時点で、自らの経験、もしくは、誰かの経験の結晶である事例報告などの質的研究などから、どの領域に特徴があるか、あるいはどの領域であれば虐待の有無による影響がないと考えられるのかを予想しなくてはならない。つまり、実際によくみられる特徴や困難さを抜き出せるような尺度を作るためには、臨床の方々の経験が必要不可欠である。そのため、これら二つの要素は、対立・独立するものではなく、両立することでそれぞれが発展していく車の両輪なのである。

また、実際に当事者が抱えている困難の理由は非常に複雑であり、複数の要因それぞれの単独の影響のみならず、複数の要因が重なり合うことによって生じる、それぞれ単独のものとは異なる問題もありうる。ぱっと見表に出るのはそれらが複合した結果であるため、観察からその奥の要因をひとつひとつ明らかにするには多くの労力が伴う。実験的手法を用いた研究は、それぞれの要因ひとつひとつの効果、そしてその交互作用を取り扱うことに向いている。それぞれの要因は貧困のような社会的要因、経験の要因、そして生理学的、器質的な要因もあるだろう。他者の怒り顔に対する反応の強さ、といった認知的な要因は、一見わかりづらいが、その上に様々な要因が重なり合う土台となりうる。このような虐待を受けた子どもに見られる特徴や困難の要因をひとつでも多く明らかにし、それを個人の理解に繋げることができれば、よりよい実践に繋がっていくと期待される。数値で示された一般論、となることで、様々な側面から考察が

行われることも期待できる。

さらに、Mizushimaらが示したように、このような研究は特徴を明らかにすることで、その変化、あるいは回復の過程をとらえていくこともできる。直接的に肌で感じる変化は勿論であるが、日々少しずつ変化していく中で、その変化を数値で表すことができれば、それは大きな励み、あるいはその先の目標設定に繋げていくこともできるのではないかと考える。

4. 最後に

主に実験室などで行われることの多い量的研究と、臨床・支援の現場で行われることの多い質的研究は、手法や必要な技術が異なることから、その両方の研究を一人が進めることは困難である。自分が経験したことのないことを肌で感じたように想像するのは難しい。これは、研究を行う上でも同じである。そのため、それぞれが最終的には、支援対象となる子どもの回復という共通の目的を持ちながらも、せっかく互いの領域で積み重ねられた知見を利用しないばかりか、抵抗感を持っている場合すら少なくないと感じる。しかし一般的な知識と個別の経験は、物事に向き合う上での車の両輪であると考えている。以前は日本では研究と臨床、福祉の結びつきが互いに弱かったが、現在では少しずつ、お互いに協力、情報提供をしあう流れが形成されつつあるように感じられる。今後、この流れが加速することで、日本における児童についての量的研究が進み、よりよい支援に繋がっていくことが十分に期待される。

また、本人の直接的な困難ではないが、社会全体が個々人の背負う困難の結果として背負う経済的損失についての検討も行われている。Wada & Igarashi (2014) では、平成24年度の児童虐待による社会が負担した費用について、児童養護施設の運営費のような「直接費用」と死亡による逸失利益や医療費、生産性の低下、犯罪による被害、生活保護費の増加などの「間接費用」に分けて取り扱い、直接費用は99億円、間接費用は1.5兆円、合計約1.6兆円にも上ることを示した。このことは、虐待による被害者の傷つきや周囲の困難といった部分に対して想像力を持つことが難しい人や組織に対しても、虐待の問題の重大さを実感してもらう手助けになるだろう。

筆者の研究もこのような多くの量的研究の一部として、少しでもなにかの基礎となることを願って行った。このような研究を行うことができたのは、総合大学という多種多様な領域の研究が行われる機関であり、かつ日々の実践を行っている現役の臨床家が多く在籍するという環境の中で、量的研究、質的研究のどちらの知識や意見にも触れることができ、それらをブラッシュアップしていくことができる環境のお陰であった。

そんな北海道大学教育臨床心理学講座のような場が、日本でもっと息づいてくれるように祈る。

引用参考文献

Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Hill, J., Raste, Y. and Plumb, I. (2001a). The “Reading the Mind in the Eyes” Test revised version: a study with normal adults, and adults with Asperger syndrome

- or high-functioning autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 42(2): 241-251.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J. and Clubley, E. (2001b). The autism-spectrum quotient (AQ): evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 31(1): 5-17.
- Baron-Cohen, S., Hoekstra, R., Knickmeyer, R. and Wheelwright, S. (2006). The Autism-Spectrum Quotient (AQ)—Adolescent Version. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 36(3): 343-350.
- Camras, L. A., Ribordy, S., Hill, J., Martino, S., Spaccarelli, S. and Stefani, R. (1988). Recognition and posing of emotional expressions by abused children and their mothers. *Developmental Psychology* 24(6): 776-781.
- Cicchetti, D., Rogosch, F. A., Maughan, A., Toth, S. L. and Bruce, J. (2003). False belief understanding in maltreated children. *Development and Psychopathology* 15(04): 1067-1091.
- De Brito, S. A., Viding, E., Sebastian, C. L., Kelly, P. A., Mechelli, A., Maris, H. and McCrory, E. J. (2013). Reduced orbitofrontal and temporal grey matter in a community sample of maltreated children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 54(1): 105-112.
- Frank, R. H., et al. (1993). The evolution of one-shot cooperation: An experiment. *Ethology and Sociobiology*, 14(4), 247-256
- 藤林武史. (2013). アタッチメント障害と里親養育(その2) 社会的養護における里親養育の意義と実際. 子ども虐待への新たなケア. 杉山登志郎 編. 東京, 学研教育出版: 193-205.
- 松本伊智朗. (2010). 総合研究報告. 子ども虐待問題と被虐待児童の自立家庭における複合的困難の構造と社会的支援のあり方に関する実証的研究. 松本伊智朗 編: 3-21 森田喜治. (2006). 児童養護施設と被虐待児 施設内心理療法師からの提言. 大阪, 創元社.
- Mizushima SG, Fujisawa TX, Takiguchi S, Kumazaki H, Tanaka S, Tomoda A. (2015). Effect of the Nature of Subsequent Environment on Oxytocin and Cortisol Secretion in Maltreated Children. *Frontiers in psychiatry / Frontiers Research Foundation*. 2015; 6: 173.
- 森田喜治. (2011). 被虐待児への児童養護施設での対応. *臨床心理学* 11(5): 648-652.
- 西澤哲. (1997). 子どものトラウマ. 東京, 講談社.
- 岡田隆介. (2002). 子どもの暴力(家族からの被害、周囲への加害). *臨床心理学* 2(2): 169-174.
- Pears, K. C. and Fisher, P. A. (2005). Emotion understanding and theory of mind among maltreated children in foster care: Evidence of deficits. *Development and Psychopathology* 17(01): 47-65.
- Pollak, S. D., Cicchetti, D., Hornung, K. and Reed, A. (2000). Recognizing emotion in faces: Developmental effects of child abuse and neglect. *Developmental Psychology* 36(5): 679-688.
- Pollak, S. D. and Tolley-Schell, S. A. (2003). Selective attention to facial emotion in physically abused children. *Journal of Abnormal Psychology* 112(3): 323-338.
- Ekman, P. and Friesen, W. V. (1976). *Pictures of Facial Affect*. CA, Consulting Psychologists Press.
- Premack, D. and Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and brain sciences* 1(04): 515-526.
- Rutter, M., Beckett, C., Castle, J., Colvert, E., Kreppner, J., Mehta, M., Stevens, S., & Sonuga-Barke, E. (2007). Effects of profound early institutional deprivation: An overview of findings from a UK longitudinal study of Romanian adoptees. *European Journal of Developmental Psychology*, 4(3),

332-350.

杉山登志郎. (2007). 子ども虐待という第四の発達障害. 東京, 学習研究社.

高貝就. (2014). ト라우マとPTSDの違い. 子どものPTSD. 友田明美, 杉山登志郎, 谷池雅子 編. 東京, 診断と治療社.

Takagishi, H., Kameshima, S., Schug, J., Koizumi, M. and Yamagishi, T. (2010). Theory of mind enhances preference for fairness. *Journal of Experimental Child Psychology* 105(1-2): 130-137.

田中康雄. (2008). 軽度発達障害：繋がりがあって生きる. 東京, 金剛出版.

Teicher, M. H., Anderson, C. M. and Polcari, A. (2012). Childhood maltreatment is associated with reduced volume in the hippocampal subfields CA3, dentate gyrus, and subiculum. *Proceedings of the National Academy of Sciences*.

友田明美. (2012). 新版 いやされない傷－児童虐待と傷ついていく脳. 東京, 診断と治療社.

Tomoda, A., Polcari, A., Anderson, C. M. and Teicher, M. H. (2012). Reduced Visual Cortex Gray Matter Volume and Thickness in Young Adults Who Witnessed Domestic Violence during Childhood. *PLoS ONE* 7(12): e52528.

Wada & Igarashi (2014). The social costs of child abuse in Japan. *Child and Youth Services Review*(46), 72-77.

若林明雄・内山登起夫・東條吉邦. (2007). 自閉症スペクトラム指数(AQ) 児童用・日本語版の標準化－高機能自閉症・アスペルガー障害児と定型発達児による検討. *心理学研究* 77(6): 534-540.

Wimmer, H. and Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition* 13(1): 103-128.

八木安理子・吉野絹子・荻野正美 (2007). 親の暴力がDV加害および児童虐待に与える影響－市民調査による男女比較－. *子どもの虐待とネグレクト* 9(1): 46-54.

Today Researches about Child Maltreatment in Terms of Quantitative research

Michiko Koizumi

Key Words

child maltreatment, child abuse, neglect, quantitative research

Abstract

Today child maltreatment becomes a significant social issue in Japan. Many qualitative studies reported that maltreated children have various types of difficulties. There are some quantitative researches about maltreated children. Quantitative researches can make basic knowledges that can be shared, and it will develop not only quantitative researches but also method to care. It is hoped that quantitative researches and qualitative studies together with mutual support.